文部科学省認可通信教育

たんぽぽ

vol. 69

平成２２年１月発行
発行者　放送大学
　　富山学習センター
責任者　所長 渡邉 裕司

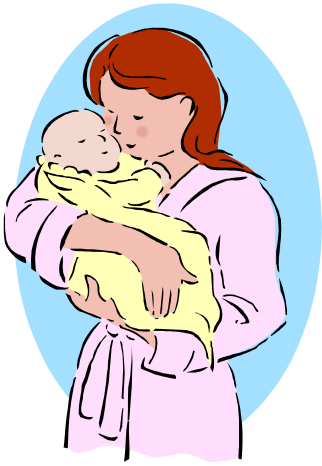
人が人を産むことの不思議にみせられて

客員教授　永 山 く に 子

早いもので、今年、私は助産師歴 40 年目を迎えた。その間、新しい家族が生まれる貴重な瞬間に立ち合わせていただき、仕事とはいえ、多くの体験から自己の成長･価値観にも大きな影響を受けてきた。立ち会った約 600 余りのお産で、幸いにも、偶然か、子どもや母親が亡くなるといったケースに出会っていない。だからといって、今後も出会わないという保証は全くないのがこの世界の常識である。勤務中には分娩時の出血で命をなくしたケースをみたり、幾度と無く分娩経過中に背筋が寒くなるような胎児の心音の低下など、神に祈るしかないような事態に遭遇したり、一晩に 4 名のお産があった晩、朝の日の出がまぶしかったことなど経験を語ればきりがない。大きくため息をつくこともあったが、それは[命を削る鉋かな]と自分にいいきかせたこともあった。しかし、無事に退院の日を迎えた家族の笑顔に幾度と無く励ましをいただくことも助産師のエネルギー源となったことは大きい。

私自身、この道を選んだ理由は、人（母親）の中にもう一人の人格を持つ一人（こども）が存在し、それ自体奇妙であることに加え、全く母親とは異なる血液（血液は混ざらない）を持つ人がいること、さらに人が人を産むことの意味は、ごく一般常識ではあるが、摩訶不思議に思えたからであった。そして、この道を目指そうと考えた。年はかなり昔、20 歳代であったと記憶している。

助産師となり約 40 事例ほどお産に関わったころ、気づいたことは、お産は母親一人がいくら頑張っても、子どもがその気にならないと生まれてこないという事実である。つまり、お母さん側の事情で、一生懸命力を掛けても子どもが頭部（95%は頭位で生まれ、5%は骨盤位）を骨盤の中に回旋、固定しなければ、お産はすすまないのである。したがって、この回旋が大きな鍵となるのである。そろそろお産のクライマックスを迎えよるとするとき、お母さんは「まだですか」と疲労の色も濃くなる。そこで助産師は「子どもさんに声を掛けてみましょう」と言う。お母さんの「あなたも頑張っているのよね」という優しい言葉賭けで、親子の「生み出そうとする力」と「生まれ出てこようとする力」が一致し、お産はすすんでいくのです。



人がこの世に生を受けることの意味は常日頃あまり考えてはいない。この選ばれし誕生について、人が人を産むことの不思議さ、さらに命の重さについて時には考えてみたいものです。